

一学期の子どもの遊びから



年長組になるという喜びや緊張、保育室が変ることにとまなうとまどい、などの複雑な気持ちで登園したと思われる三十三名の園児と新学期が始まった。幼稚園生活は二年目ではあるが、子どもたちの遊びを見た時、どうしてこんな状態なのだろうかと不安になるほどグループ遊びになれていないという印象を受けた。

男児十九名は、比較的積極的に遊ぶ子・ボスの子・ボスに従って遊ぶ子・ひとりだけで遊ぶ子・友だちの遊びをぼんやりと見ている子など、種々の程度の子があるが、自分の思いどおりに遊ぶようにする子が多く、子ども間の摩擦がしばしばみられた。

女児十四名は、二・三人の固定した友だちとのみ遊び、友だちを広げようとせず、スケールが小さく長続きしない遊びが多かった。

全体的に言語表現の豊かな子とそうでない子に分かれていて、活発に話す子からは言葉が次々にでるが、話さない子からはほとんど

福 西 百 合

でてこない。これが友だちの範囲を広めていくうえに非常に影響すると思われた。又言語表現をする前に子どもたちがいろいろのことを考えているかどうかに疑問を感じた。むしろ考えるよりも他から与えられたものをそのまま受け入れてしまい、与えられない場合にはどうしてよいかわからぬままにぼんやりしているという状態と思われた。

このような子どもたちが自分の考えで積極的に遊べるように考え、それを言語や動作で表現できるようにと望みつつ、子どもたちと接しはじめた。子どもたちのようないくつかを記してみる。

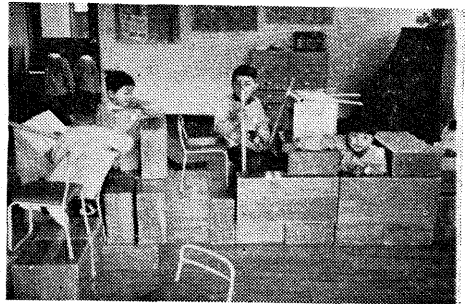
「粘土いりませんか」(写真1)

新しい粘土を包装のまま、ビニールをかけた机の上に置いた。「粘土いりませんか?」「はい、買いますよ。二個ください」などと粘土を売買し、買った子は粘土の包装をはずして遊びはじめた。

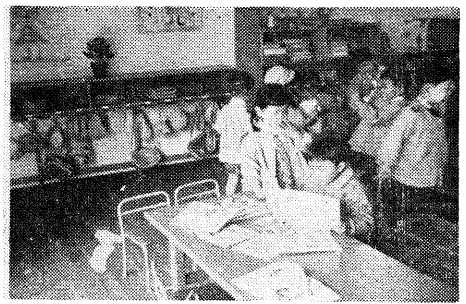
1



2



3



ことはむずかしいらしい。

「・・・」——ぼんやり

してる子（写真3）

遊びたいがどんな遊びをどのようにに遊んだらよいかわからない。友だちの遊びに入っていない。たとえ遊んでも少人数で発展性がなく長続きしない。こんなことからぼんやりと友だちの遊びを傍観している子が時々みられた。

「バーンバーン」——

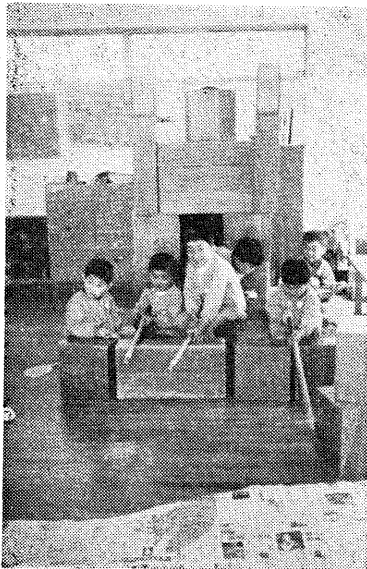
うちあい（写真4）

机の上という広さの制限のためか、大きな粘土のかたまりに体当りしている子は少なく、まるめたり、切ったりの小さいものが多くみられた。

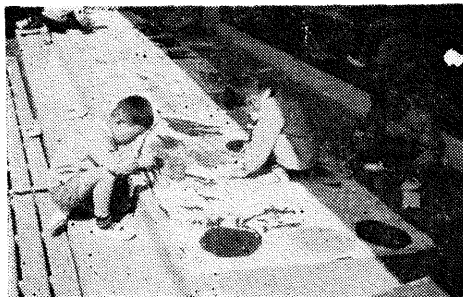
「ヒコーキにのせて!」「やだよ!」（写真2）

ボスのな子が中心になって箱積木でヒコーキを作った。椅子で座席を作っているが、のせてほしい友だちがくると「やだよ!」と横を向いてしまったり、口論をしたりの不穏なやりとりになってしまった。考えとしては友だちと仲良くということがわかっていても、自分の意志を通そうとする者同志が相手を理解し、受け入れる

4



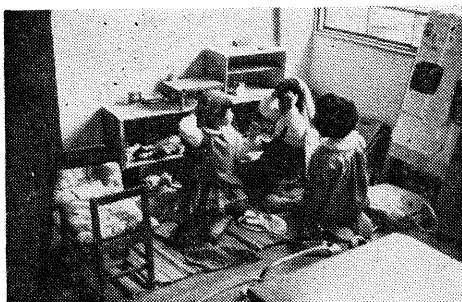
5



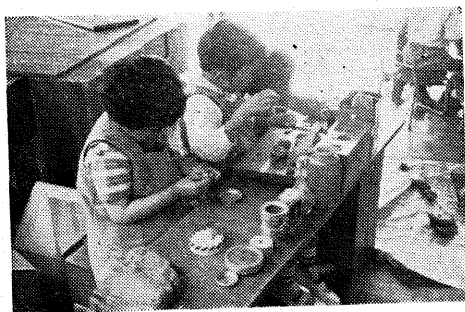
6



7



8



積極的な男児が中心で箱積木を使い、女児はほんの数人が加わるのみである。箱積木で鉄人を作り、その前から竹馬の鉄砲でうちあう。うつ方もうたれる方も演技力を発揮して、バツタリ倒れるところなど実感がこもっていた。

「これとこれは目だよ!」(写真う・6)

遊びが小さく狭いので、大きくのびのびとしたものに触れさせたいと思い、大きいこいのぼり作りを考えた。幅一メートル・長さ約五メートルの紙をテラスに置き、「大きいこいのぼりを作りましょう」ときそった。外形を書く子・うろこを書く子・尾の部分を書く

子、クレパスとえのぐを使って、二日ばかりで出来上った。頭部に三つの円が描かれた。「これとこれは目だよ。これは口だよ」と説明されたものの、三つ目のこいのぼりのようで妙な顔でみている子もあった。平面に全部をおさめようと子どもは考えたらしい。

「あか! がんばれ!」

新入園児が自己主張の衝突でけんかをはじめた。力を発散しきれずにうっせきしているためではなかろうかと思い、完全に疲れさせる遊びを考え、走りっこを提案した。意外に多数が加わり、リレー・タイヤとびを組み合わせて汗を流してフウフウいいながらも楽し

んでいた。

「わたしお母さんよ！」(写真7・8)

五月中旬になり、やっと数人の女兒がままごとコーナーに入りはじめた。ふろしきをかぶり、役を決めるまではよかったが、あまり長続きせずに終ってしまった。

粘土を使った子は、いろいろのこちそうを作っては並べていたが、お客さんをよんだり、お店にしたりして友だちによびかけようとはしていなかった。

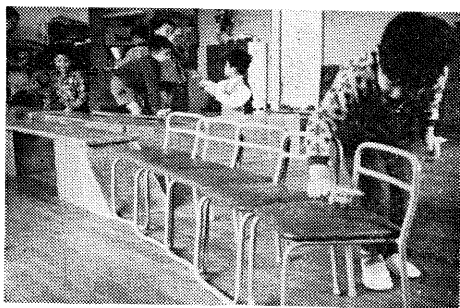
「こっちの音はかみなりだよ！」

追いかけて逃げたりしながらキャーキャーさわぐのを男女児とも好きである。「かみなりだよ！」といいながら部屋中かけまわっていたが、そのうちひとり、「こっちの音がかみなりだよ！」あらしだよ！」といいつつ、オルガンで低い音をひき、「こっちの音はおてんき」と高い音をひき、合図しはじめた。走りまわる子どもたちもそれに応じてかみなりの時には走り、おてんきの時には歩くというように音の違いをききわけていた。

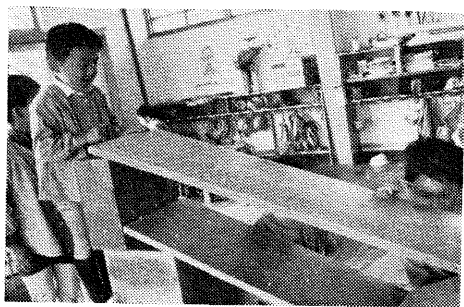
「ワァー、ひとりで走るよ！」(写真9・10)

おもちゃの小さなヘリコプターが十五ほどあったのでだしてみた。はじめは机の上で走らせてはプロペラをまわし、それを持ってあちこちとばせるようにして走っていたが、次第に積木や椅子を使って滑走路やヘリポートを作りはじめた。椅子の下の特ネルから

9



10

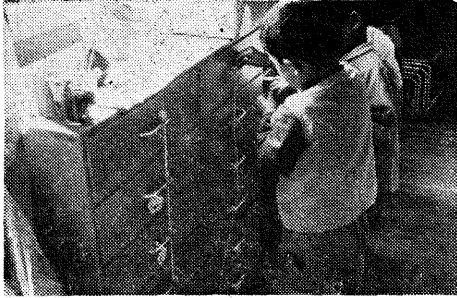


傾面を上ったり変化させていた。そのうちに板をななめにしてその上を走らせはじめた。手を離しても走るので太さわぎだった。何度もしているうちに板を四枚組み合わせ複雑なものになった。一番上の部分から、下まで走らせるためには、方向だけではどうしても手で変えなければならなかった。しかしそれでも十分満足な様子だった。

「ここ車庫だよ！」

ヘリコプターが着陸すると、それを待って自動車走りだすというしくみにした。積木を並べて駐車場や車庫を作った。

「全部一度にあくよ！」(写真11・12)



12

ひきだしの取手にひもを通し、二人で両はじをひっぱっては、一つ一つのひきだしをあけていたが、次第にたて一列六つのひきだしを一緒にあげられることに気づいた。そのうちにひもの一方のほしに組木をしばりつけ、結局一方だけひけば二列一緒にひきだしをあげられることを発見し、得意であった。

「ヒコーキのつちやつ

たよ!」(写真13)



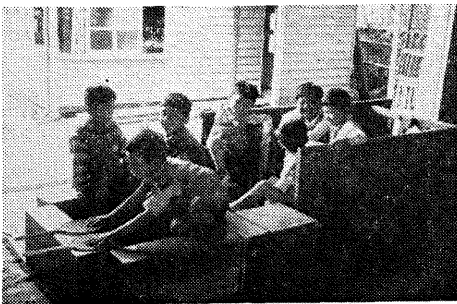
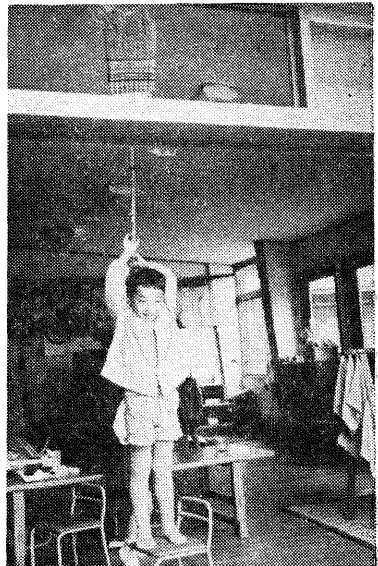
13

紙でヒコーキを折ってとばしているうちに鴨居にのってしまっ

た。「ヒコーキのつちやつたよ」とのことなので、どうしたらよいかしらと試みていたら、「長いものがいいよ」とほうきをだしてきて一番背の高い子が落とし役になった。苦心したが、少ししか落とせなかった。

「本部どうぞ!」(写真14・15)

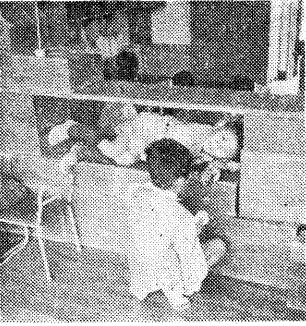
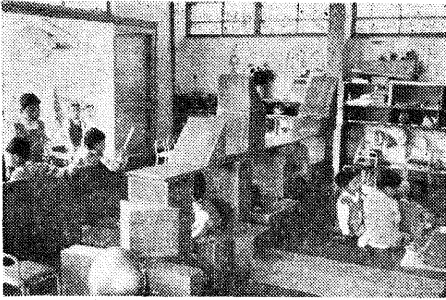
机を横にして椅子を入れ自動車を作る。「無線つきだよ」といっ



14



て組木で作ったものを使っていた。しかし本部どうぞと、よびかけだけで、その次に続く会話はあまりでてこなかった。



「寝る所もあるよ!」(写真16・17)
箱積木の三人乗りヒコキを作った。前頭部にバランスポールをつけたり工夫した。客席の一部が広がっていて寝られるようになってあった。

「おもしろいよ!」

三角形の積木二つを不安定な形に合わせておき、その一方にとびのつては形がくずれる時のスリルを味わうもの。今までは友だちの遊びに入らずにぼんやり見てばかりいた子二人が、くり返しこれを楽しんでいた。

「チョウチョのけむしだ

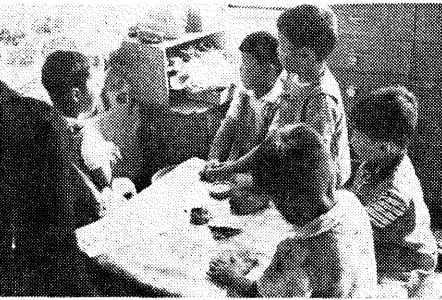
ってキャベツくうよ!」

園庭のあちこちにけむし、青虫などがでてきた。それをつかまえてきては、本をだして何の虫か調べた。

「この虫は葉を食べちゃって困るわね」と教師がいったら、「チョウチョのけむしだってキャベツ食うよ!」といわれてしまった。

「食堂ですよ。どれ

たべますか」(写真18)





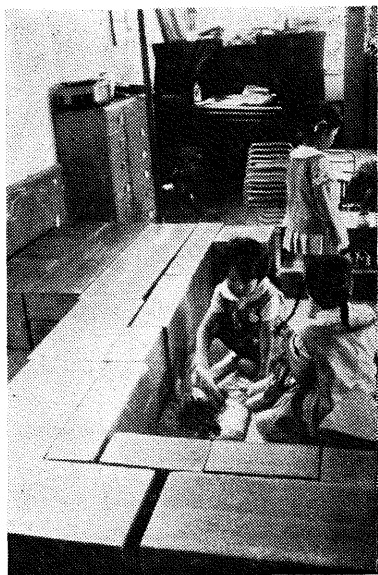
ヒコーキの紙に米国の古雑誌を
だしておいたら、おいしそうな
があるといって食物の写真の部分
をきりはじめた。それを壁にはり
食堂を作った。粘土や紙でごちそ
うを作り遊んでいた。
「ずっとむこうから
出るよ!」(写真19・20)



19

21

22



では流し大奮闘していた。

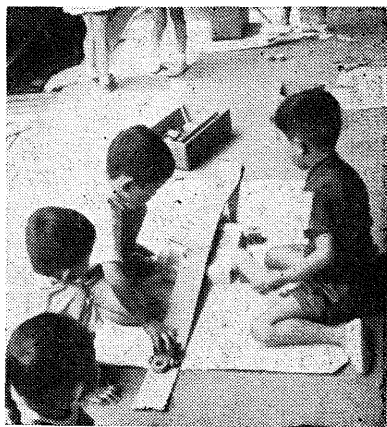
「こっちはお二階

よ!」(写真21・22)

男児が砂場遊びに熱中している
間に、女児が積木を使いはじめ、
おままごとのお部屋を作った。は
じめは積木で周囲を高くつみ、そ
の中にむしろをしいて部屋にして
いたが、次第に広がり、高い方を
二階にして寝室にした。

「この船、橋の下を

通るよ」(写真23)



船をおりはじめ

た子がいたため、

模造紙に色をつけ

て海を作った。糸

をつけた船を倒さ

ずにひきよせる競

争をしているうち

に、「橋をかけよ

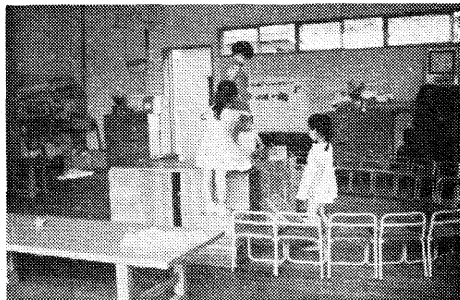
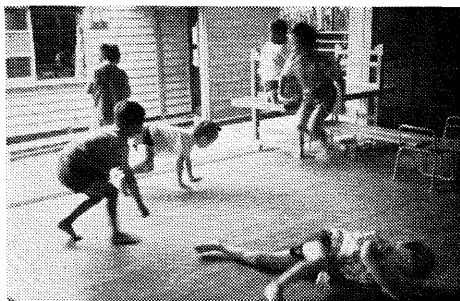
うよ」と一人が提

案し、ダンボールの橋を作った。橋の上を自動車が走り、その下を船が通るという立体交差になった。

「たなばたつくろうよ」

他のクラスがたなばたのかざりを作っているのをみて、作りはじめた。笹の葉にたんぎくをさげることをたなばたと思っている子かなりあったので、たなばたのお話をした。「お星さまつくろうよ」と色紙でお星さまを作りはじめた子がいたので、ガラス戸にはるよう提案した。「これも星だよ！」と星を切り取った残りの部分をはりはじめた子もあり、種々の星がはられた。ガラス戸を三枚重ねてみると遠近感がでてもしろかった。星の形も普通書かれているものと違いいろいろあった。

「ここ、とびこみ台だよ」(写真24・25)



椅子を円形に並べ、その上に板をのせて、そこからとびこみ、活発に部屋中を泳ぎまわる。それを見た女児数名も、積木のとびこみ台を作り、とびこんでいた。

「だめだ！ きれちゃうよ」(写真26・27)

自動車二台をなわで結んで押していたが、そのうちにひっぱりあいになった。なわのために結んだ部分や途中が切れて何度も切れるたびに結んでいたが、「これじゃ切れちゃうから、切れないのでひっぱりっこしよう」と太い綱をだして綱引きになってしまった。

「こんにちわ、どなたです」(写真28)



朝、数人の女兒が「こんにちわ、どなたです」と歌いはじめた。はじめは部屋の中でお互いに名前をきき合っていたが、門の所にていき、登園してくる友だちがみえはじめると、「あつ、きた、きた!こんにちわ、どなたです」と大声でうたい、名前をいわせてから門を通すというのをくり返した。

「できるようになったよ!」

(写真29)

積木・砂場・粘土などで、独創

的遊びを作りだして遊ぶ男児と対称的に思えるのが、鉄棒のまわりにいる女兒たちである。友だちと話をしながら、いろいろと変った動作をしている子もたまにはあるが、何をしようかと考える前に鉄棒の周囲を逃避場所にして、ただそこで他人がするのをだまって見ている、同じことをくり返している子が多い。

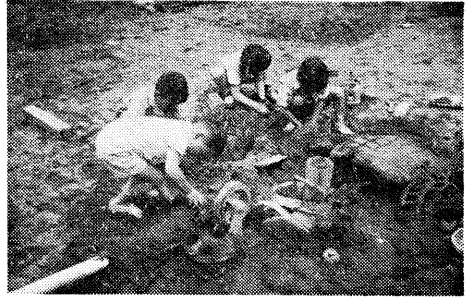
「むこうからも流せるし、

ここからだっていいんだよ」(写真30・31)

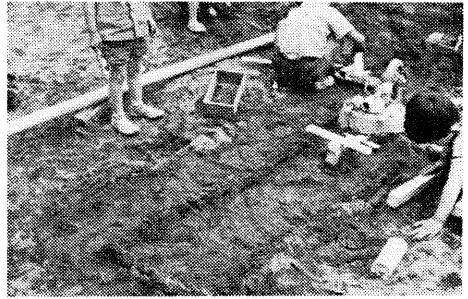
といのの一部を砂の中に入れ、その出口に他のものを連ねては砂場の川に流しこむようにした。水により砂がくずれるために、次々に



30



31



砂をすくいあげては川をなおした。その横に飛行場を作り、子どもたちの作った木の飛行機を滑走させてはとびたてていた。

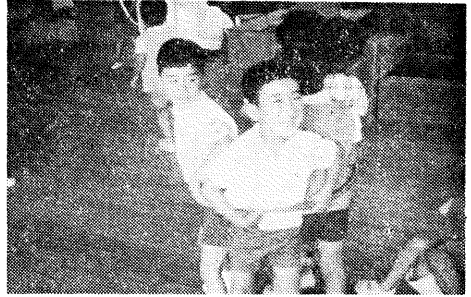
「扇風機みたい！」

女兒がテラスを歩いているかたつむりをみつけた。二匹さがして棒をのぼる競争をさせようということになった。二匹がノソノソとのぼっていくのをみていた子が、「扇風機みたい！」と叫んだ。たしかに殻の動きと扇風機の首ふりはにている点があると感じさせられた。

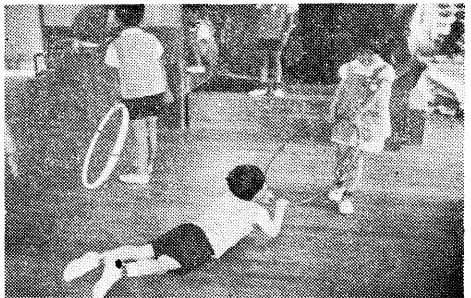
「フープだ！」（写真32・33）

フープが新しく入った日の朝、部屋に並べておいたら、その中を

32



33



トントンとびはじめ、遊園地で乗ってきたコーヒークップだと四五人が中に入ってぐるぐるまわる子、浮き袋だよとそれにぶらさがってひっぱってもらう子、ボールを中に入れようとする子、円盤だと走りまわる子、ここにあてたら大当りと黒板にマークをつけてそこまでころがす子など使い方は種々あった。

☆一学期の子どもたちの遊びからいくつかをとりにしてみました。子どもは次々に遊びを発見し新しいことに対面しているのだとつくづく感じました。しかし子どもの成長をどれだけ正しい形で援助しているかどうかと考えさせられる点が多くありました。

（茨城県・下妻小友幼稚園）